

異界からきた女君達（源氏物語ノート）

北川原 平造

一 開かれた都城

この覚え書きは、源氏物語の第一部すなわち「藤裏葉」に至る物語のなかに登場してくる女君^{めぎみ}たちのうち、物語の展開のうえで何らかの重要な役割りを担っている方々、紫の上、秋好中宮、明石の上玉鬘は、他の女性とはちがって、都の外部世界からやってきた、あるいはひとたび都から離れてあらためて外の世界からの人として現れてきたという登場のしかたを示していることを、考察の対象とする。それを源氏物語という世界を構成している、ひとつの「物語空間」という視点から見えていくこととしたい。

まずその考察のひとつの足がかりとして、伊勢物語をとりあげてみると、源氏物語のなかで、「伊勢物語に正三位を合はせて」（「絵合」）とあるが、その当時の伊勢物語が現存テキストと同一とは考えられないにしても、原伊勢物語が先行作品として、源氏物語の構想に影響を及ぼしていることはすでに指摘されていることである。歌物語としての伊勢物語を統一する楔が、昔男Ⅱ在原業平であるように、もと女性を主人公とした中篇物語が長篇物語へと成長するための統一的主人公の役目を担っているのが光源氏である。そのような物語の主人公としての機能のしかたが似ておっしゃるかも知っている点

が、はじめにあげた女君たちの役目を明らかにするであろう。

伊勢物語の主人公は、(1)「東」^{あづま}（付、陸奥）に下る（七段―十五段）。(2)狩使として伊勢に出かける（六十九段―七十五段）。(3)宇佐使として筑紫に出向く（六十段―六十一段）。その他の行動は京の周辺として省略するとして、昔男は、歌物語の性格からして遂次「うた」がつけ加えられて雪だるま式にふくれていくという結果、日本国中を自由に歩きまわっている感がある。もちろん、光源氏の高貴な身分にひきくらべて、昔男は大した拘束もない身の上であることも考えられるが、業平の生きた時代の平安京が、源氏物語の書き継がれた時代にくらべて停滞感の少ない、地方との交流のうえからみて、「開かれた都城」としての性格が強いと見られていたことが、歌物語の主人公をのびのびと行動させる結果になったと言えよう。現在の伊勢物語に都人の優越感を露骨にみせているところもある（十四段、栗原のあねはの松など）が、大筋には変更がない。

狩使や宇佐使の場合は旅行の目的が一応示されているものの東下りは「京にありわびて」とのみ語りおこされている。つまり物語の興味の中心は旅行目的ではなく、むしろその旅先きでどういう男女のかかわりあいを持ち、どのように歌をよみかわしたかにある。歌を通して「いろいろのみ」を教えるのが目的だということになる。昔

男が別の世界に旅していつてその世界の女性と交渉をもつという形で語られている。その点が源氏物語の主人公の場合とくらべて、伊勢物語の物語空間は、主人公の行動の自由さによって中心から周辺へ拡大していく形になっている。（ここでは「貴種流離譚」の伝承図式は特に問題にしないこととする。）

二 伝奇から写実へ

源氏物語の物語空間を考察するに先だって、物語文学の展開のうえから若干考えておくこととする。源氏物語「絵合」の巻で、「先づ物語の出で来はじめの親なる竹取の翁に空穂の俊蔭を合はせ争ふ」（古典全書本巻二、二七四ページ）とあって、現存のそれらのテキストが右に述べられている作品と同じとは言えないが、物語の元祖であるとしている。まず竹取物語については「なよ竹の世々に旧りにけることをかしき節もなければ、かぐや姫のこの世の濁りにも穢れず、遙かに思ひのぼれる契りたかく、神世のことなめれば、浅はかなる女、目も及ばぬならむかし」（同右）と、この神話的な天上世界にまたがる物語空間を設定する。一方、宇津保物語の「俊蔭」については、「俊蔭は、激しき波風におぼれ知らぬ国に放たれしかど、なほさして行きけるかたの志もかなひて、他の朝廷にもわが国にもあり難き才の程を広め、名を残しける古き心をいふに……」（同、二七五ページ）とあって、遣唐使として出発したが、暴風雨のため南海に流され「波斯国」に漂着、思いがけない体験をして、琴の奥儀をきわめ名琴を携えて帰国するという、広大な世界が語られる。

これにつき「一体、物語の系統は、物語のいで来はじめのころ、竹取物語のやうな小説物語の系統と伊勢・大和のやうな歌物語との二つの系統が並び存した。大和物語にはその後半が著しく説話的に

なつてゐて、歌物語と小説物語との合体的傾向を示してゐるのであるが、宇津保物語はこの二大系統が完全に融合統一されたものであるとみてよろしいと思ふ。そして竹取物語は終始伝奇的であるが、宇津保物語になると伝奇的と写実的とが相半ばしてゐる。落窪物語になると伝奇的の色彩はほとんど全く払拭され、源氏物語に至つて完全に写実的となるのである。」（宮田和一郎 古典全書本『宇津保物語』解説より）というのが一般的見解であろう。平安朝の物語が成立してゐる過程を考えてみると、『遊仙窟』などの神仙譚―女神と人間との恋愛譚―が、はやく奈良朝に愛読され、その影響から在来の物語を漢文で書き直したりして、語部の伝承に由来する古歌を伝えるために漢文の序をつけたような形があらわれ、さらにそれを国文で書くという形ができてきて、平安朝の歌物語が形成されてくる（折口信夫全集第十二巻『日本文学啓蒙』による）。従つてまず男の手による漢文の形態が想定されよう。右に言う伝奇物語の代表として竹取物語の場合は、万葉集巻十六の竹取翁の長歌や丹後風土記逸文の比治の真名井の話をはじめとする古伝承と深くかわつており、それらは話の筋の進展改変があり、書きかえが重ねられ、右に引いた源氏物語にも「なよ竹の世々に旧りにけるをかしき節もなければ」と、世間周知の伝承を踏まえた作品とみなされているが、仏典や漢籍になかなかの知識をもつ人が参与していることがわかる。そこには天上（月）世界と地上との交渉が描かれ、またかぐや姫の求婚者に対する要請は遠く西域や印度あるいは蓮葉山までも包含して、当時の世界の涯に及んでいる。また宇津保物語の、まだ伝奇的色彩の濃い「俊蔭」の巻では波斯国に漂着して、今日のマレー半島あるいは南海諸島に往来したとある。

いわゆる伝奇物語の世界が、このような物語空間を提示している

のに対して、歌物語としての伊勢物語は、そういう神話的、空想的な空間を脱して地上的、現実的な空間において語られていると言えよう。なお、源氏物語の作者が説いているように、「（物語トイウモノハ）その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ。よきもあしきも、世に経る人の有様の、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節節を、心に籠め難くて、言ひ置きはじめたるなり。よきさまに言ふとは、よきことの限り出で、人に従はむとは、またあやしきさまのめづらしきことを取り集めたる、皆方々につけたる、この世の外の事ならずかし。」（「物語トイウモノハ」）神代より世にあることを、記し置きけるなり。日本紀などは、ただかたそぼぞかし。これら（物語）にこそ道々しく委しきことはあらめ。」（「螢」古典全書本三一 一八二―一八三ページ）と、「作り物語」の性格を論じ、さきに引用した「写実」の意味を、誇張、修飾はあるにしても、この現実世界に起りうることを語っているのと規定している。

なお補足すれば、「伝奇的」という要素は、いわゆる説話文学の系列では『靈異記』にはじまって、やがて『今昔物語』に見られるごとく、それは色濃く受け継がれている。伊勢物語や源氏物語が写実的であるということとをさきに伝奇的世界を脱してと述べたが、実はその背後にある広大な伝奇的世界と深く交渉していることを否定するものではなく、右に引いた「螢」の巻の物語の虚実論を支えるものは、仏教の方便説というよりも、矛盾に充ちた人間の存在そのものが、伝奇性という要素を深く包含しているからに外ならないと言ってよいであろう。いま物語の、文学のジャンルとして伝奇か写実かという分類を立てて述べているにすぎないまでのことである。

三 閉じられた都城

右のようなわけで写実的になったといわれる物語空間を伊勢物語と源氏物語とを対比してもう一度やや細かくみていくこととする。さきに、業平時代の平安京を「開かれた都城」と称してみたが、これは厳密な考証のうえで言うのではなく、作品から受ける感覚で言うまでのことである。であるから、なるほど平安京という都城は存在したが、それが都市としての機能をどれだけ発揮していたかという点は、まだ検討していない。ただ言えることは、中央集権という政治権力が平安京から放射され地方に受けとめられ、その見返りとして中央の政治機構とそれを支え運営する人々とを充足させるに足る物資財物が送達されてくる。そういう機能がはたらくに伴って国家という空間がのびちみしながら出現してくる。それは極めて不安定な隙間の多い空漠とした空間であるが、その中心にある権力空間は相当濃密な性質を示していたといえよう。その濃密さを都城空間と称してみた。その都城が伊勢物語を読むかぎりでは、閉鎖的な印象を与えないことを「開かれた都城」と称したのである。これが源氏物語にあらわれた時代になると、都城としての形態は格段に整ってきたであろうが、中央集権的な政治権力は弛緩しそれだけに都城は孤立的な停滞感を強めたであろう。平安朝の女流文学の世界の狭さは、その「閉された都城」の女だけの社会―後宮―を中心とした社交の場の、もてあそび草という性格がもたらしたということになろうか。しかしながらそれらの女流文学の作り手たちの多くは、受領階級出身の女房である。彼女たちの父や夫や兄弟は地方官としてその一生を旅ぐらし（伊勢物語二十三段の「田舎わたらひしける人」のごとく）に費している。

時には彼女たちもその父や夫に従って地方へ往来し地方暮らしの体験をする。紫式部が、父為時の望んでかなえられなかった越前の国守に、その文学の才が認められてようやく念願を達して赴任した時、父とともに下向したのは彼女十九歳と伝えられている。雪深い北陸の風土から受けた感懐の一端はその家集にもみえる。「ふりつみていとむつかしきゆきをかきすてて、山のやうにしましたるに、人人のばりて、なほこれいであて見たまへといへば ふるさとにかへるやまぢのそれならばこころやゆくとゆきもみてまし」(国歌大観本による)。父の任期のはてるのを待たず帰京したのは長徳三年末か四年はじめ、せいぜい二年たらずの越前在住であったようである。また「和泉式部、保昌にぐして丹後に侍りけるころ、都に歌合侍りけるに小式部内侍歌よみにとられて侍りけるを、定頼卿つばねのかたにまうできて、歌はいかがせさせ給ふ、丹後へ人は遣はしてけむや、使まうでこずや、いかに心もとなくおぼすらむなど、たはぶれて立ちけるを、ひきとどめてよめる 大江山いくの道の遠ければまだふみも見ずあまの橋立 小式部内侍」(「金葉和歌集」雑上 国歌大観本による)。さらには、時代は下がるが、更級日記の作者、菅原孝標の女は、十歳で父の任地上総に下り、寛仁四年父の任期満了による長途の帰京の旅の記を書き残している。

このように、閉ざされた「女だけの社会」と言われるが、現実には彼女たちは閉ざされた都城空間から脱け出して地方生活をいくらかでも体験しているのである。だが当時地方というものは文化的には低次の空間と見なされ、そこは荒涼と空漠とに占められているがごとく感ぜられていたのであろうか。いやそうではなさそうだが、やがて起ってくる地方武士集団を考えれば、地方の秘めたエネルギーを思わなければならないだろう。しかし、とりあえずは、みいりのよい

地方の国司となつて蓄財につとめる話や中央で望みを失った貴族が地方に赴任しそのまま土着して豪華な生活を営む話など数多く語られていようと、地方が文化的価値として都城と肩を並べあるいは優位性を示すにはまだ到っていない。だから彼女らの体験が物語文学の世界にそのものとして描かれ展開していかないのだと短絡的に考へてはならないが、加藤周一の言うように、受領階級出の彼女たちが、集団内部の周辺に位置することにより集団の観察・分析・叙述には有利な知的距離を有したが、その所属した平安朝廷社会の閉鎖性によって集団外部を無視せざるをえなかったのだ(「言葉と人間」による)という見方も成立するであろう。しかし、この問題については結論をいそぐまい。

四 活力を齎す女君達

やや回り道をしたが、ようやく伊勢物語と源氏物語との対比から当初の目標へむかうこととしたい。

(1) 昔男の東下りにあい応ずるのは、光源氏の須磨退居、明石流浪である。いわゆる「貴種流離譚」という伝承的な物語の種によるものであることは言うまでもないが、東国から陸奥という茫漠たる世界への旅にくらべて、須磨は都城空間からつい一足のところにある。しかし物語の展開のうえからは、異常な決意のもとに政敵の仕かけに先んじて都城を離れた。須磨に到着しては白氏文集によりつつ「まことに三千里の外心地する」、さらに八月十五夜には「二千里外古人心と誦し」、また菅原道真の太宰府流謫の詩「恩賜の御衣は今ここにありと誦し」たと語られる。さらに「明石」の巻には「知らぬ世界に、珍しき憂への限り見つれど」とあるように、それは光源氏にとっては今まで無縁の別世界であると規定

される。その別世界で得た明石の上は、何の後だてもない田舎育ちという理由づけはあるものの、光源氏の京帰還後もなかなか都城空間へ入ってこようとしない。いかにも別世界の住人といったおもむきがみえる。その父はかつては宮廷社会で相当な地位を占めていた身分であるにもかかわらずである。彼女は光源氏が苦難のなかで得た愛人として、さらに光源氏のただ一人の娘、のちの明石中宮を生み宮廷における光源氏の地歩を固めるうえで大きな役割をもった。

(2) 狩使の段は、六条御息所母子の伊勢行きと対比されよう。昔男が斎宮に逢うということは重大な禁忌の犯しであるが、光源氏の場合、父桐壺帝がかつて憂慮した前東宮夫人との恋愛が光源氏の正妻葵の上の死をもたらしに至る、生霊出現の怪奇を示したが、斎宮にえらばれた娘に伴って都城を去るという形で一応の終息をみせ、やがて伊勢という聖域において浄化されて戻る。御息所の死後光源氏は前斎宮の後だてとなり朱雀院の懇望をしりぞけて、わが子冷泉帝の後宮にすすめる。のちの秋好中宮である。これもまた光源氏政権の固めの役を担う。

(3) 宇佐使の話は、玉鬘の物語との対応が考えられよう。昔男の場合は自分を見かぎった妻に再会、妻ははずかしめられて姿をかくす歌物語であるが、これは若かった光源氏が愛人夕顔をものけにとり殺されてのち、彼女の遺児玉鬘は乳母に伴われて筑紫に下る。乳母の夫、太宰小式が客死してのち、美しく成人した玉鬘に求婚する土地の勢力者、大夫の監を避けてようやく都城に戻る。たまたま長谷詣での途次、昔の夕顔の侍女右近と邂逅してやがて光源氏の六条院に引きとられる。いわゆる玉鬘物語と称される一群の諸段を形成して、光源氏の成熟した心境に微妙なさざ波を立たせ、

また多くの貴公子の求愛を受けながら冷泉帝の後宮に入る話もあるなかを意外にも髭黒大将の手に落ちる。異境からやってきた不思議な魅力をまきちらす女である。

(4) 源氏物語では、紫の上は早く母を失い北山に隠棲する祖母尼のもとで養育されていた。夕顔の死後、瘡病をわずらった光源氏が北山（その主峯は鞍馬山）に加持のため出向いたところで、幼い紫の上は発見される。運命的な出逢いであり光源氏一生の最愛の妻となる。彼女は光源氏のひそかに思慕する藤壺中宮の姪にあたる。「ねびゆかむ様ゆかしき人かな、と目とまり給ふ。さるは、限りなう心をつくし聞ゆる人に、いとよう似奉るが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞおつる」「若紫」古典全書本二八七ページと語られている。北山への道は「山の桜はまだ盛にて、入りもておはするままだに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかる有様もならひ給はず、所狭き御身にて、めづらしう思されけり」（同前二八一ページ）とあるように、光源氏にとっては北山も一種の異境であった。その北山で発見した少女を、祖母の死後、父兵部卿宮に引取られる先を越してひそかに二条院へ連れてくる。そのようにして紫の上は都城空間に入る。ところで、伊勢物語には対比すべき昔男の行動空間はないが、初冠の段に、平城の京で「いとなまめいたる女はらから」をかいま見たことが思いおこされる。さらに、惟喬親王の隠棲した小野を訪うあたりも空間としては近似する。もともと以上の対比は、源氏物語の女君たちを語る話の糸口にすぎないのであるから厳密は要さないことである。

以上述べてきた四人の女君が平安京という都城空間にとつては異空間（異境、異界）からやってきた人物であることが、源氏物語（第一部）にとって何の意味もないことであろうか。さきに紫式部をは

じめ物語の成生に深くかわった女房たちの所属する階層と体験に触れたが、文化的には低い次元とみなされ、みやびの対極にある地方（田舎）というものの潜在的に所有する「エネルギー」に、たとえ無意識にせよ彼女たちは触れてきたにちがいない。物語をはぐくみ育てる過程で、彼女たちは、伝承と自己欲求とのせめぎ合いの中から、無意識につきあげてくる「エネルギー」をどのように具体化し、形象化していったであろうか。源氏物語について言うならば、すでに停滞の色濃く、藤原氏独占体制におおわれている宮廷社会において、彼女らが語り綴る物語の世界は、「閉ざされた都城」に限定されてゆく。さきに引いた周辺理論のごとく彼女らが集団外部の情報に暗く、その結果として、源氏物語に描かれた庶民生活は「夕顔」の宿の一場面にすぎないかもしれないが、しかし、長篇源氏物語をつなぎあわせ統一する主人公光源氏の行動圏の狹隘を補うものとして、異空間から女君たちがやってくる。異境の蔵する生命力を彼女たちは身につけてやってくる。この生命の泉に光源氏が感染することによって、物語の世界は活力を賦与される。昔男が自ら外部世界へ出向くことで獲得するものを光源氏は居ながらにして手に入れるという図式が成り立つ。

源氏物語が存立するために、停滞する物語空間をゆり動かすようにして出現して来る女君たち。それは極めて自然に物語に組みこまれておりながら、その性格と役割のうえから、都城空間と異空間とを接合するために、つねに複合体として形成された。紫の上と藤壺中宮と、明石の上と明石女御と、六条御息所と秋好中宮と、夕顔と玉鬘と、これを単なる偶然な筆のなりゆきとみなして済ましてしまうような問題ではないと考えている。

今回は、本文に即した細かい論証に欠け、極めて杜撰、疎漏な記

述にすぎないので、他日あらためて詳論することを期している。